

小金城跡(松戸市)

築城年代:天文6年(1537年)、築城者:高城胤吉

前方が流鉄流山線の小金城址駅ブリッジから見た小金城跡のエリア/この地の豪族で、千葉氏の一族から出た高城氏の居城で、戦国時代の
下総地方を代表する巨城であったと云う



小金城跡縄張図/小金城址駅はこの北西側にある/高城氏は、近くの根木内城から本拠地を移し、ここに小金城を築き、東葛地方一帯を支配していたと云う/現在はそのほとんどが宅地化されてしまい、馬場曲輪の一部のみが「大谷口歴史公園」としてわずかに整備されている



小金城址駅から大谷口歴史公園に向かうと、「馬屋敷」があった所が公園として整備されていた



「大谷口馬屋敷緑地」とある



こんな塩梅



左手を見ると土塁の名残があった



右手を見たところ/この上部に城域が展開していたようだ



反対側から土塁を見たところ



その土塁に登ってみたところ



大谷口歴史公園側から振り返って大谷口馬屋敷緑地を見たところ/この周辺には根郷谷(根小屋・根古屋)であったようだ



さて、前方の木々の辺りが大谷口歴史公園のようだ



この辺りが金杉口



右手を見ると石碑が立っている



こな塩梅



アップで見たところ



小金城跡の保存に功績のあった方の顕彰碑のようだ

ここは、中世城郭跡で、東葛地域最大の勢力を誇っていた
喜城氏の居城の一部が現在も残されている場所です。公園の
創設にあたっては、大倉邦夫氏より寄付をいただき、遺跡の
保存と公園としての地域への還元に大いに役立てることで
できました。これを記念して、この碑を建立するものです。
なお、大倉氏は、都市公園の整備に顕著な功績があったと
して、平成8年度建設大臣表彰を受けられました。

兜を戴いた石碑で、「三日月 上向き 家紋」は”千葉氏”らしい



その左手にある階段/ここから虎口門へ行けるようだ



ここはさらに左手にある公園のトイレがあるスペース



説明板が立っている/前方の階段を登ると障子堀があるようだ





ここは右手の方にある旧金杉口/ここからも虎口門へ行けるようだ



旧金杉口を登る



前方に何やら立っている



これが金杉口と呼ばれる北側の虎口(城郭の出入口)に立つ門/冠木門形式で復元されている



金杉口跡

ここは金杉口かなすぎぐちと呼ばれる小金城の虎口こぐち（出入口）の一つです。小金城には大手口（東）、達摩口たつま（北東）、金杉口（北）、大谷口（南）の四つの虎口があったとされています。

西側の低地から城内へ入ると正面と南側は高い急斜面にあたり北へ進むこととなります。

ここには、三段（推定）の階段を持ち、最上段には門柱を立てたとと思われる土壇どたん（砂を突き固めた、径約六十センチメートル、高さ約十センチ）が四方所見つかりましたが、その構造までは解りません。奥に広がる広場は斜面部に土を盛って人工的に造った広場です。さらに奥へ進むと空堀があります。堀の外側を進んで行き、大勝院の裏手から城内へ入ったものと推定されています。



金杉口跡復原図（記中祥彦氏作図）

松戸市
松戸市教育委員会
平成九年四月



金杉口跡復原図(田中祥彦氏作図)

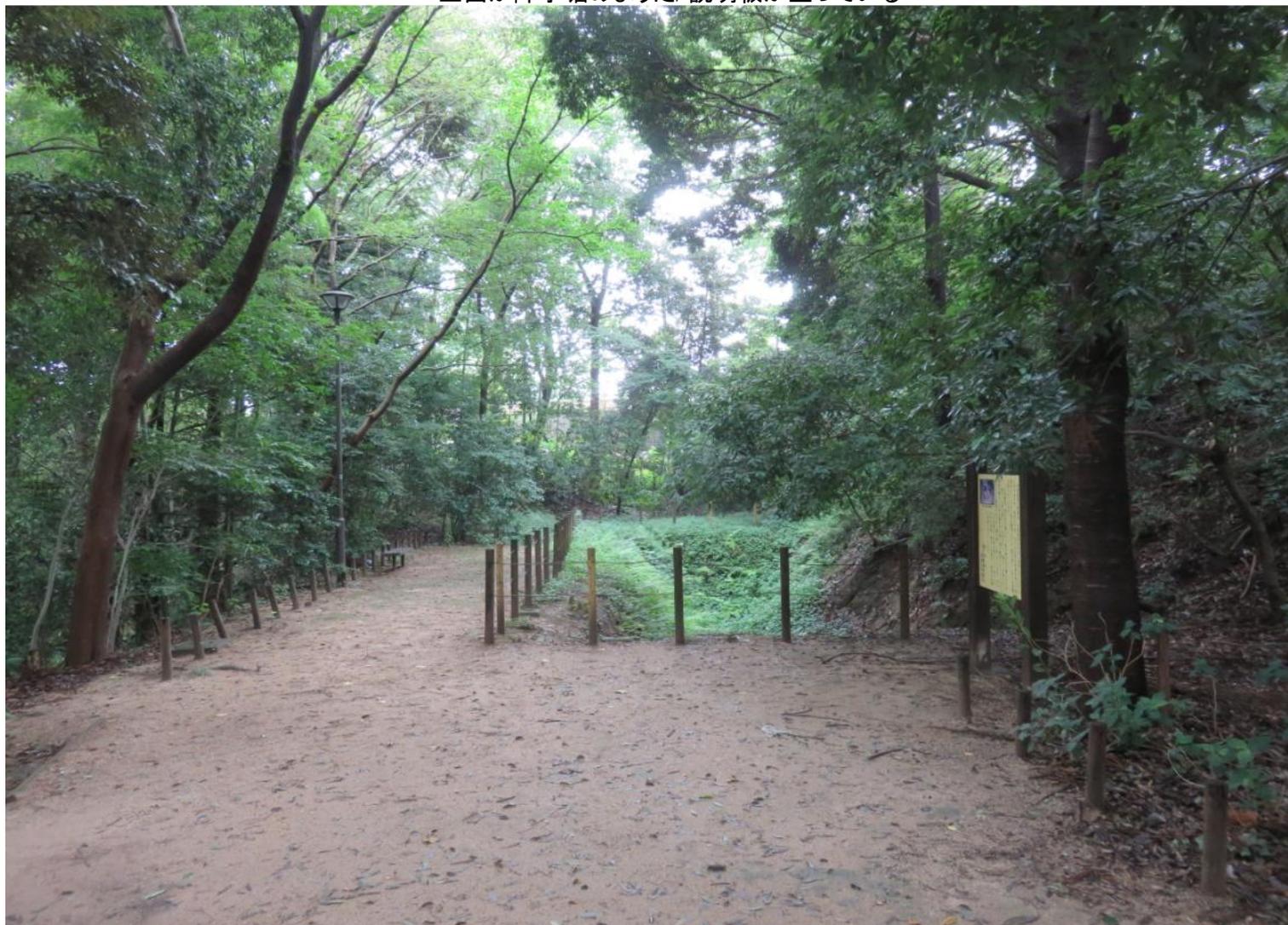
これが人工的に造られた広場(平場)



その先には右手の上部にある郭へ登る階段がある/前方には障子堀があるようだ



正面が障子堀のようだ/説明板が立っている





障子の部分(発掘調査後)

堀（障子堀）

中世城郭の特徴は、自然地形を巧みに利用していることにありますが、金杉口では、さらに自然の斜面を削って急傾斜とし、その下部に幅四メートル以上、深さ約二・五メートルの空堀からほりが造られています。

この空堀は、虎口から約二十メートル程の地点から掘られており、途中一カ所に高さ二メートルの間仕切り（障子しょうじ）が造られて、堀底を侵入してきた敵をその壁で遮る構造となつています。さきやこのような構造のものを「障子堀」と呼んでいます。また、この空堀は、砂地を掘り下げて造られているため底、壁共に砂質で、非常に水捌はけは良くなっています。

松戸市
松戸市教育委員会
平成九年四月



障子の部分(発掘調査後)

これが障子堀だが、土や植物で埋まっていて良く分からない



反対側から見たところ



障子堀越しに上部にある郭を見たところ



さて、その上部にある郭に登ってみよう



ここがその郭



そこで右手の土塁を見たところ



これはその土塁上から、先程の虎口門を入った平場を見下ろしたところ



土塁を側面から見たところ/それほど高くは築かれていない(身を隠す程度か)



郭から登ってきた階段方向を見たところ



階段の右手も、こんな塩梅



その先はここで土塁が無くなってしまっている/この更に先は住宅地として開発されていて、破壊されてしまったようだ



そこから先程の障子堀を見下ろしたところ/郭を攻める敵は、下の障子堀を越えて登って来なければならないが、そこを郭の土塁の陰から狙われることとなる [\(クリックしてビデオを見る\)](#)



説明板や石碑が立っている



郭内の地盤を掘り下げて、その土を周辺に盛り上げたということのようだ



土塁の断面(帯状の黒い層が旧地表)

土 塁

土塁とは、土を盛り上げて造った土手状の防御施設のこととて、通常は堀を掘った土を盛り上げて造ります。

金杉口では西側から北側にかけてL字状に見られます。その構造は、城の内側を約五十センチ掘り下げ、台地の縁辺部に土塁の底になる部分を幅約三メートルの帯状に残します。その上に粘土を盛り上げて高さ約一・五メートルの土塁としています。土塁としては低くみえますが、外側の空堀の構造から見て、敵の侵入を防ぐと云うよりも、自分の身を隠す程度の機能であつたらうと思われます。

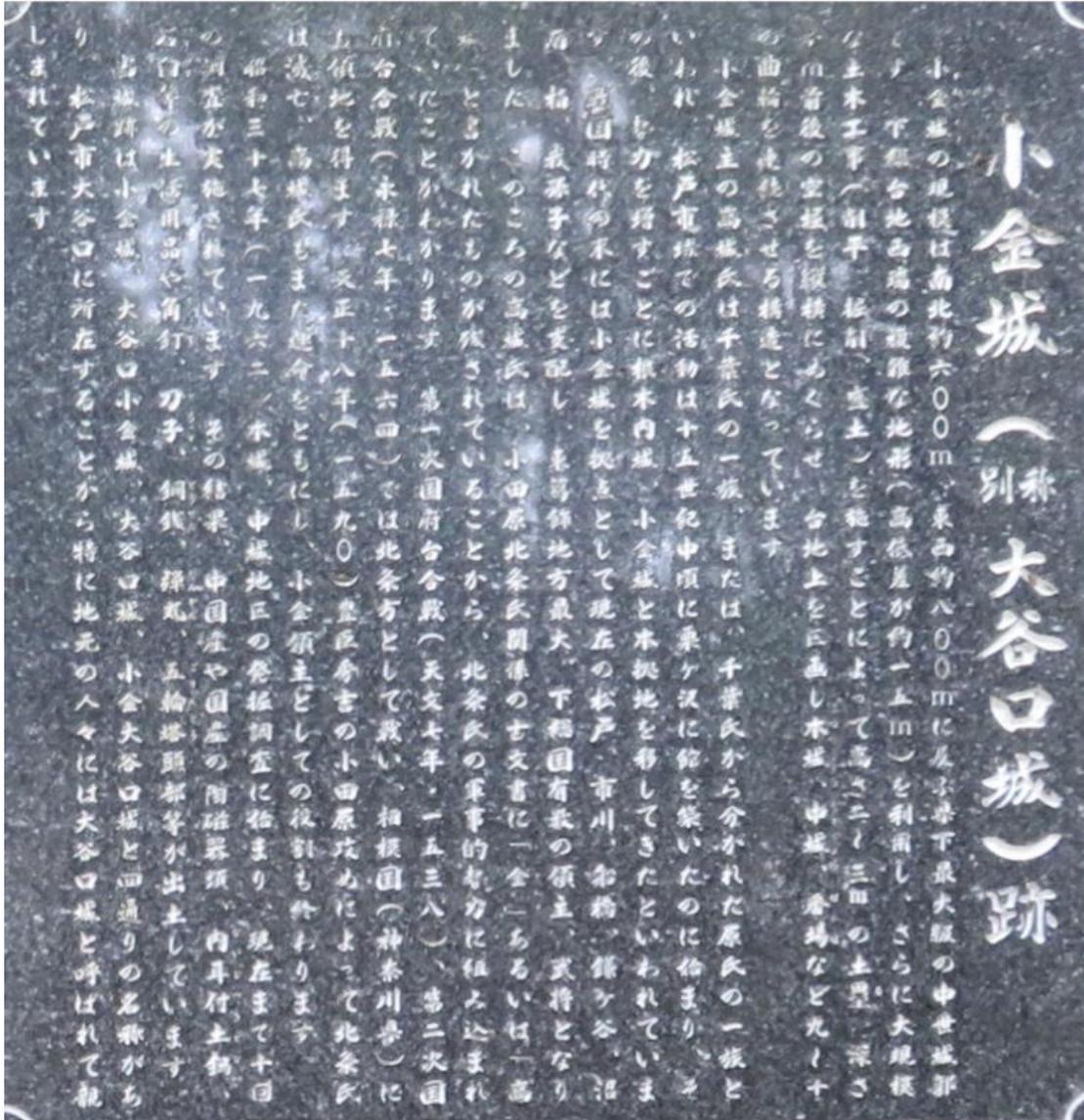
小金城では、他に粘土や赤土(関東ローム)をそれぞれ約十センチ位の厚さで突き固め、それを交互に高さ二メートル以上に積み上げた土塁も確認されています。

松戸市
松戸市教育委員会
平成九年四月



土塁の断面(帯状の黒い層が旧地表)

小金城主の高城氏は千葉氏または分家の原氏の一族と云われ、松戸市域の活動は15世紀中頃に栗ヶ沢に館を築いたのに始まり根本内城、小金城と本拠地を移してきたと記されている



上空から見た小金城跡/北条氏の軍事的勢力に組み込まれており、1590年(天正18年)に豊臣秀吉の小田原攻めによって共に滅亡したと云う



金杉口周辺のアップ/左手に馬屋敷、右手に大勝院が見て取れる



さて、こちらは郭の南側斜面下の平場



階段を下りて右手を見たところ



正面が畝堀/右手に説明板が立っている



これも北条氏が得意とする築城技術の一つ



畝堀(発掘調査後)

堀(畝堀)

ここで発見された堀は幅七^{トイ}、深さ約三^{トイ}(現地表面から)と規模では普通です。しかし、堀底に断面が蒲鉾形かまぼこの畝うね(高さ約九十^{センチ})が堀の方向と直行する向きに連続して造られた、全国的にも非常に珍しい構造をしています。この施設の利点は、侵入した敵が堀底の小溝に足をとられ、横への移動がしずらくなり、その敵を狙い討てることだと云われています。特にこの畝堀うねぼりは、畝部分が粘土層を掘り込んでおり、非常に滑りやすく、効果的となっています。

堀底に加工を施した堀は、関東地方では小田原北条氏の軍事的勢力下にあった城に多く見られるところから、小金城(高城氏)の戦国時代末の状況が、古文書だけでなく、城の施設からも伺うことができそうです。

松戸市

松戸市教育委員会

平成九年四月



畝堀(発掘調査後)

これが畝堀



アップで見たところ/土で埋まっています良く分からない



畝堀越しに上部にある郭を見たところ



さて、これは階段を下りた左手の方向を見たところ



この先は住宅地となっているようだ



さて、正面は大勝院の南東に所在する達磨口跡に残る土塁



左手に標柱と説明板が見える



北東側の達磨口





昼間は架け渡し、夜は回転させる木橋が造られていたと記されている

小金城達摩口跡

小金城は十六世紀の後半、高城氏が本拠地としていた城でその規模は南北約六〇〇メートル、東西約八〇〇メートルに及び県最大級の中世城郭です。江戸時代初期の正保三年(一六四六)に書かれた「高城家之由來書」には「高城三年(一五三〇)に築城を始め、天文六年(一五三七)に完成したとされています。その構造は下谷地西端の傾斜な地形、高低差約十五メートルを利用して、さざに大規模な土木工事(削平、掘削、盛土)を施すことにより高城二〜三メートルの土塁、深さ十メートル前後の空堀を縦横にめぐらせ、台地上を区画し本城、中城、番場等九〜十の曲輪を連続させる構造となっています。小金城には大手口(東)、達摩口(北東)、金杉口(北)、大谷口(南)の四力所に虎口(出入口)があったとされています。伝説によれば、達摩口には昼間は架け渡し、夜間は回転させる木橋が造られていたとされています。小金城主の高城氏は千葉氏の一族、または千葉氏から分かれた原氏の一族といわれ、松戸市域での活動は十五世紀の中頃に栗ヶ沢(現在の小金原)に館を築いたのに始まり、その後、勢力を増すことに根木内城、小金城と本拠地を移してきたといわれています。戦国時代の末には小金城を拠点として現在の松戸市川、船橋、鎌ヶ谷、沼南、柏、我孫子などを支配し、東葛飾地方最大の領主・武將となりました。この頃の高城氏は、小田原北条氏の軍事的勢力に組み込まれていました。天正十八年(一五九〇)豊臣秀吉の小田原攻めによって北条氏は滅亡し、高城氏も運命を共にし小金領主としての役割も終わります。この達摩口跡は昭和六十一年(一九八六)に大倉邦夫氏より土地二二五・六四平方メートルが松戸市教育委員会へ寄贈され、小金城の貴重な遺構として保存されています。また、ここから西へ約三〇〇メートルで金杉口跡があり、土塁、竈垣、障子堀等が復元され、「大谷口歴史公園」として公開されています。

振り返ると、前方は天神山のエリアか・・・/その手前の低地は堀跡と云うことのような



さて、達磨口跡に僅かに残る虎口遺構へ進もう



こなな塩梅



両サイドに土塁



左手の土塁を見たところ



右手の土塁を見たところ



その土塁に登ってみたところ



虎口の遺構を見たところ



そこで右手を見たところ



同じく左手を見たところ



これは左手の土塁が南方向に続いている部分を見たところ/右手前方が虎口遺構のあった場所/この左手で土塁は破壊されている



さて、大勝院へ行ってみよう



ここが大勝院/大きな立派な寺院だ



古くは根木内城の祈願所であったが、根木内城が手狭になったことから、この地に自然の谷を利用しながら深濠・土塁を築き上げて移転し、十余万坪の城郭を完功させて城中の鬼門に安じた三ノ丸に大勝院を移転、以後、大谷口城主高城一族の祈願寺となったと記されている

大勝院の由緒

- 名称 遠矢山普門寺大勝院
- 宗派 真言宗豊山派
- 本山 奈良県桜井市 総本山長谷寺
- 本尊 十一面観世音菩薩 弘法大師(空海上人)
興教大師(覚賢上人)

この寺は古く、根木内城の祈願寺として現在の額市虎ヶ丘付近にあった。享禄三年(1530)、高橋下野守胤吉、胤辰は根木内城が手狭になったことから、江戸川池淵源に屹り立った高台の地の剽を獲盡下総國小金領大谷口村のこの地に自然の谷を利用しながら深濠、土塁を築き上げて移転し十余万坪の城郭を完功させた。城中には諸士の住居、城外、殿平賀には勇荘なる家臣館を構えたり、横須賀の平地には下級家臣を配し、南方馬橋には出城を築き威風自ら四隣を圧し、城中の鬼門に安じた三ノ丸に大勝院も移転させ、天文六年九月(1537 後秦良天皇御治世)護持僧榮秀法印によって開山されたのである。以後大谷口城主高城一族の祈願寺として大勝院蟬口不動尊に日夜將兵、家臣の武運長久を祈願することから遠矢山大勝院という全国唯一の珍しい寺名が付けられた。爾來、高城氏は勢力を得て北条氏の他國衆として武蔵下総を指揮し遠く神奈川県磯原の地にも威風を轟かすのであるが、北条、豊臣両氏の反目に及んで小田原城に敗れ捕われたのである。そして大谷口城も天正十八年五月十八日(1590)浅野長政の軍門に焼亡し大勝院も焼失したのである。徳川氏の時代には寺運を十分に復旧することはできなかった。

近世になって時々崎東福寺末に加えられる様になってからは寺運の良きを得て本寺格となり、高城氏領内の門末寺四十余ヶ寺を擁してその頂点に立ったのであるが、やがて本寺の多くは事情により廃寺、あるいは合寺して現在は松戸市内等に十六ヶ寺(寶光院・大泉院・吉祥寺・正福寺・医王寺・長聖寺・正真寺・中根寺・華嚴寺・寶藏院・慈眼寺・誓宗壽寺、東陽寺・延壽院・普門院・普如意寺)を旧門末寺として現存し、九ヶ寺(東光院・正光院・泉藏院・念藏院・清藏院・宝性院・密來院・不動院・勝藏院)は大勝院に合寺したのである。また、小金八坂神社の別当寺清藏院の本寺であるということから、事情により徳川氏の命を受けて、同社の御神体を護持管理をし、山内の別社に奉安すること今日まで及んだのであるが、昭和四十八年七月同社が北小金駅付近の旧境内から、現在地に移転し改築した事を記念に、十年後の昭和五十七年十月、当山第三十八世良豊によって小金八坂神社に遷宮鎮座させたのである。

大勝院は古くから新義真言宗の教学の道場として多くの學問僧を育成し學山として法脈を保ち当時の論草等は総本山長谷寺寶藏に今なお残存している。当山三十一世義海大僧正は、後に東京護国寺實主となり、豊山中学(現、日大豊山高校)を創設し、豊山派管長、長谷寺化主に就いた。第三十三世與澄大僧正は松戸寶光院を経て目白不動金泉院住職となり、學僧として新義真言宗の事相学を確立させた。第三十六世諱禪僧正は、明治、大正にかけて、大勝院塾を設けて地域子弟の教育にあたった。

東は二十七日、大谷口城の北に置かれてあり、寺の北に山あり、地即し大谷口城とし、山は、大谷口城の南に置かれてあり、寺の南に置かれてあり、大勝院の推園も開院したのである。このように山は多くの高僧を輩出した。

昭和の戦乱後は広大な寺領のほとんどが戦時解放政策によって失ってしまったのであるが、檀徒の協力によって約二十ヶ年を経て、境内の整備が昭和五十五年完了した。しかし、昭和五十六年十月、暴徒によって放火、本堂、大書院等が焼失してしまったのである。大僧越夫倉邦夫氏ら、旧家檀信徒はこれに屈することなく浄財を再び寄せて昭和五十八年八月全てを復興完成させたのである。

大谷口城は廢城と化した後も土塁深濠延々と残存し時の様々な推移にも著しい変遷を見ずに三百七十年余の永き年月を続けたのであるが、昭和三十七年、ついに地域開発の時運に押し流されて、中世大谷口城郭の遺構の殆どを、東急不動産株式会社の手によって破壊されてしまい、今はわずかに当時の面影を残すのは、当院祈願寺であった大勝院周囲の遠矢山だけとなってしまったのである。

- 保護樹木 大谷口城跡 推定樹齡 五百年
- 山さくら 推定樹齡 七百年
- 保護樹林 周囲松林等(谷宮等により枯滅し、うちがけられた)

山門から境内を見たところ



本堂/昭和58年(1983年)の再建



さて、この辺りは東側の「大手口」であったと思われるエリア



反対側から見たところ/遺構は残っていない



さて、こちらは南側の「大谷口」



左下が「大谷口」



前方が「馬場山」



その左手を見たところ/「外番場」方向か・・・



この付近は至る所に「大谷口」の名が残る



さて、正面は「神明社」へ向かう道すがらにある説明板と石碑



こんな塩梅



小金城跡

戦国時代の豪族で、東葛地方に勢力のあつた高城氏の居城跡です。城の完成は天文六年（一五三七）とされています。自然地形を巧みに利用した、県下でも有数の規模をもつ城郭です。高城氏は、天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉による小田原攻めの際、北条方に加わつたため小金城も秀吉方の武将浅野長政の軍に攻められ落城します。

現在は城のある台地上も宅地化が進み、往時の姿を思い浮かべることも困難になりましたが、大勝院の西側にある大谷口歴史公園内に土塁、空堀（畝堀、障子堀）などの遺構を一部復元し、公開しています。

平成一〇年三月
松戸市教育委員会

「小金大谷口城跡」と刻まれた石碑



さて、ここが「神明社」(神明神社)



「旧大谷口村現松戸市大谷口鎮守神明神社は小金城主高城氏天文年間に城鎮守として馬屋敷の地に創建す。落城後家臣団帰農し大谷口村を興す時神明宮は大日靈命を祀り村鎮守に転ず。」と記されている

大谷口鎮守 神明神社由緒

旧大谷口村現松戸市大谷口鎮守神明神社は小金城主高城氏天文年間に城鎮守として馬屋敷の地に創建す。落城後家臣団帰農し大谷口村を興す時神明宮は大日靈命を祀り村鎮守に転ず。安政四年書状に曰く大谷口村に鎮守神明宮女躰大権現香取大明神有りと。神明は番場組香取は中組女躰は下組に崇敬され後に二社は神明神社に合祀。現社殿江戸期当地支配旗本後継土屋匠作大工垣い明治二五年竣工。村祭（祭日旧曆九月一七日現一〇月一七日）神式行事各種祈願等他、出征兵士歡送集落集會等に社殿境内使用多々。昭和二三年四月神社文書に氏子数六五氏子総代鈴木傳兵衛・大熊義光・大倉邦夫。三名記載。同二九年宗教法人化宮司中村寛次。氏子大熊義光同大倉邦夫責任役員に就く。同三七年東急不動産小金城跡開発に伴い同三九年秋大谷口馬屋敷三一〇番地より二六〇番地に社殿移転し集會所新設平成四年同所建替。其後大熊・中村兩役員死去により同五年宮司 田嶋允一・氏子大倉邦夫 同、池田清 三名責任役員に大熊義治総代に選出す。氏子諸先達の御労苦を基に我ら今日の幸あるを多謝し社史を記す。

周囲の坂下から神明神社の地を見上げたところ



庚申塔を使用した石垣風になっている高まりは土塁の名残とも云うが・・・



さて、ここは城域の南東に所在する東漸寺/ここも大きな立派な寺院だ



寺伝では開創された根木内の地が狭少でかつ堂宇もいたく破損していたので、当時小金の城主であった高城氏の勧めで根木内から現在地に移ったと云う/小金城主高城氏の息子であった了学上人は檀林である地元・東漸寺で幼い頃より出家し、東漸寺住職となった

東漸寺

東漸寺は浄土宗の僧、経譽愚底により文明十三年（一四八一）に根木内に創建され、十六世紀の中頃には現在の場所へ移ったと考えられています。小金城は十六世紀の東葛飾地域の政治的中心で、この城に高城氏が定着した時期と一致します。東漸寺もまた高城氏と共に発展しました。

江戸時代には、関東十八檀林という浄土宗学問所の一つとなりますが、その背景には第十七世住職、照譽了学が存在がありました。了学は滅亡した高城氏の出身ですが、徳川家康の授戒師を務め、二代将軍徳川秀忠にも信任が厚く、秀忠の葬儀では大導師を務めたほどです。

*東漸寺のシダレザクラ
シダレザクラは枝がやわらかく枝垂れる桜の総称で、東漸寺のシダレザクラは、エドヒガンザクラであり実生苗より育てられた稀少なサクラです。

*高城氏制札
小金城主高城氏が発給した制札で、東漸寺の安全を保障したものです。地域の歴史を理解する上で、大変貴重な資料です。

*二十五菩薩来迎図
死者を浄土へ迎えようと降りてきた阿弥陀如来と二十五菩薩を描いた絵です。

総門を潜ると左右に土塁の名残のようなマウンドがあった



山門/仁王門



中雀門



本堂



本堂の左手前には観音堂が建つ



鐘楼



これは北小金駅北口近くに立つ小金宿の説明板/千葉県で最も歴史のある街の一つとして知られる旧水戸街道の小金宿は、この東漸寺を中心に形成されていたと云う



さて、ここは大手口の東側に所在する慶林寺



小金城主高城胤辰が母の霊を弔うために建立したのが始まりと云う

熊耳山慶林寺

戦国時代の高城氏は小金城を拠点として、現在の松戸、市川、柏、鎌ヶ谷、我孫子などを支配し、東葛飾地方最大の領主でした。小金城主高城胤吉が、永禄八年（一五六五）に病没すると、その妻は胤吉の菩提を弔うため髪をおろし桂林尼と号して、この地に庵を建てます。桂林尼の死後、子の胤辰が庵のあつた場所に母の霊を弔うために寺を建立したのが慶林寺の始まりです。寺号は最初、桂林寺でしたが天正十九年（一五九一）徳川家康から御朱印十石を受領し、その時から慶林寺となりました。なお、本堂の裏手に、享保十五年（一七三〇）に建てられた桂林尼の墓があります。

慶林寺の文化財

市指定有形文化財

太鼓（天正十二年銘）

市指定史跡

桂林尼の墓所

綿貫夏右衛門の墓所

平成九年三月
松戸市教育委員会

當山（慶林寺）の由来

名称 曹洞宗（禅宗）慶林寺

今から八百年ほど前に、高祖道元禅師様が我が国に開かれ、四代目の太祖瑩山禅師様が盛んになされました。このお一方は、宗門の父母にも当たるお方ですから、両祖大師と申し上げます。

両大本山 福井の永平寺（道元禅師様御創立）

開創 鶴見の總持寺（瑩山禅師様御創立）

御本尊 永禄八年（西暦一五六五年）

山号 大福薬師瑠璃光如来（座像）

旧寺号 熊耳山（ゆうじざん）と申します。

御開山 桂林寺（天正十九年の御朱印状により、慶林寺となり、現在に至っております。）

開基様 大岸舜達大和尚（慶長五年四月遷化）

史跡 月菴珪琳尼（げったんけいりんに）

高城下野守胤吉公之室（永禄八年三月寂）

野馬奉行、綿貫夏右衛門の墓所

有形文化財 天正十二年の墨書銘のある太鼓（三十cm）非公開

平成二十四年八月二十日

熊谷穰重 奉納 三十世代

本堂



本堂の右手前にある七福神と説明板



松戸史跡七福神、寿老尊

寿老尊 中国の老子の化身ともいわれ、長寿を授ける福神である。頭が長く短身の老人で、人の長寿を記した巻物をつけた杖と団扇を持ち、長寿を司る神使といわれる。鹿を連れている。この寿老尊と福祿寿は同体異名という説もあり、寿老尊を除き吉祥天を入れる例もある。

当慶林寺は、禅宗・曹洞宗の寺で創建は永禄8(1565)年である。寺の裏手の墓地には、中世の豪族高城胤吉の妻桂林尼の墓(松戸市指定史跡)と、江戸時代の小金牧の野馬奉行綿貫夏右衛門の墓がある。

平成24年11月

これが小金城主高城胤辰の母、桂林尼の墓



市史跡 珪琳尼の墓所

月菴珪琳尼は、小金大谷口城を築いた高城胤吉の妻で十三代千葉介昌胤の妹にあたり胤吉の死後（永録八年一五六五年二月十二日）剃髪して月菴珪琳尼と称し、鹿島神霊の辺に菴を結んだ、そして胤吉の没した翌月の三月十二日に永眠した。その子従五位下下野守小金城主胤辰は、珪琳尼追福のために同所に慶（桂）林寺を建立した。

なお、現在ある月菴珪琳尼の墓石は享保十五年（一七三〇年）に子孫といわれる高城清右エ門が建てたもので、その銘に「胤辰の妻」とあるは誤りである。

昭和四十一年五月十七日指定
松戸市教育委員会

これは小金牧の野馬奉行であった綿貫夏右衛門の墓所



参考ホームページ

<http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/013chiba/087kogane/kogane.html>

<http://otakeya.in.coocan.jp/info01/koganeoooyaguti.htm>

<http://massneko.hatenablog.com/entry/2014/06/26/060000>

<http://massneko.hatenablog.com/entry/2014/06/27/060000>

https://mrs.living.jp/kashiwa/event_leisure/reporter/3506491

<https://blog.goo.ne.jp/sztimes/e/15c938ab18f606323581998f6ee96e04>

<http://kahoo0516.blog.fc2.com/blog-entry-37.html>

